

## 「2018年インドネシア・インドネシア大学スプリングスクールプログラム 参加報告書」

京都大学大学院法学研究科修士2年 康村 博宣

東南アジアへの短期留学は、タイ、ベトナムに続き、3カ国目となった。インドネシアの特徴は、日本の約2倍の人口を有し、イスラム教徒が9割近くを占めることである。これまでのプログラムと同様に、2週間の中で言語学習と文化体験、共同発表を行った。

インドネシア語は、動詞などの活用がなく、声調もないため比較的習得のしやすい言語である。基本単語のインプットさえできれば、会話や読解が可能である。実際に、道順を訊く、買い物をする、レストランで注文をする、といった会話が滞在中に実践できた。

文化体験では、アルンバとガムランの楽器演奏、バティック染付を体験した。テレビで見たことはあったものの、演奏することは初めてであり、竹や金属の独特の音色を味わうことができ良かった。その一方で、日本の伝統楽器については私自身いまだ演奏したことがないため、もっと和楽器についても見識を深めたい気持ちが湧いてきた。

共同発表に関しては、出発前に相手方の学生と連絡を取り合い、「日本とインドネシアにおける宗教観の違い」をテーマとした。多様な宗教が認められながらも、民族の統一という国家の基盤をいかに安定させているか大変興味深いと感じた。日本とインドネシアではともに信教の自由が認められているが、インドネシアにおいては自らの信仰する宗教を選ぶことが義務づけられている。政治と宗教、生活と宗教の関係も日本と異なる。

日本では、政教分離の原則により、特定の宗教が国からいかなる特権も受けることはない。表現の自由があり、政治家が宗教冒涜罪で裁きを受けることはない。公立学校では宗教教育が行われず、給食やそうじ当番、学級活動などを通して道徳の実践教育が行われている。

インドネシアにはSARAという言葉がある。これはsuku(民族)、agama(宗教)、ras(人種)、antargolongan(階層)の頭文字をとった言葉であり、この4つが関連する問題については、インドネシア人はもちろん滞在する外国人もとくに神経を使う必要があるそうである。インドネシアでは、宗教省が宗教教育を管轄し、公立学校でも宗派ごとに異なる教科書を用いて宗教教育が行われ、それが道徳教育として位置づけられている。

以上から、日本では宗教が私的領域に属し、インドネシアでは公的領域に属すると言えるだろう。ほとんどの日本人にとって宗教を意識する機会は冠婚葬祭などに限られ、他人の宗教に対しては寛容であるか無関心である。インドネシア人にとって宗教は身近なものであり、宗教を大切にす。もっとも、日本とインドネシアのどちらのやり方が優れているか比較できるようなものではない。ただ、宗教に対する捉え方がまったく異なるという事実を知ることが、異なる価値観に対する寛容さ、共存の前提になることは確かである。

今回の発表では、自国における社会問題の解決に向けて宗教がどのような役割を果たし得るか、その可能性を探るところまでは及ばなかったものの、今日のグローバル化の流れにおいて、多様性と寛容に関するトピックはますます重要性を帯びていくだろう。そのための布石として、今回の発表を今後の課題として何かしらの形で生かしていきたいと思う。